

演説部の没落運命：各部々報

| | |
|-----|---|
| 著者 | 本多，信博 |
| 雑誌名 | 龍南 |
| 巻 | 2 2 3 |
| ページ | 8 7 - 9 0 |
| 発行年 | 1932-12-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/7102 |

砲丸投 1 霜出(高)十一米三七 2 納富(五)十一米〇五

3 小出(藥)

納富日頃の調子なく接戦となつて意外の結果を生み出しました。

棒高飛 1 増田(高)三米一〇A 2 大宮(五)三米

3 木下(高)二米九〇

大宮遂に宿敵に恨を呑む。

走幅飛 1 増田(高)六米三二 2 木村(藥)五米八一

3 納富(五)五米六八。

身深福崎又フアウルして實力を出せずに止む。

總點高工の五二點に十點以上と言ふ慘敗を受けたのであります。我々は日々奮激を以て武夫原に精進しております。此處に心ある人は大地を磨る競技の忠味を部員とし共に味はれん事を希望して筆を擱きます。尙十一月廿日の對福高戦には必勝を誓ふものであります。

(文責大宮二一、一九)

演説部の没落運命

演説部委員 本 多 信 博

時代の潮流に流されて流言蜚語、その極に達し演説部の興廢を一身に擔つて、之以上にはと云ふ程度まで衰微せしめた私である緣なき衆生は度し難し君もその一人なりと云はれたのも私であつた。その責任は充分に負か、一体何處に負ふか、私の貧弱なる之の双肩に負ふ、だが一口、死に行く者の愚知を、聞いてもらひたい。

昭和七年の二月、送別演説會を開いた。辯士八名、聴衆八名、だが私はそれを惡めなかつた。歴代の委員は龍南には演説を聞くだけの熱がないと捨科白を残して去つて行つたが諸君、私は君等に熱がないから演説部が衰微して行くのだとそんな逃口上の自分に都合のいい原因を探し出してまで自分の責任を免れんとするのではない。懸賞辯論會を開いた。だが私はその數のさまで多くなき必然性を豫知してゐた。

何の爲に演説部はその存在價値を失はしめんとしつゝあるか、矢張り雜誌部と同じく自己の内部に或否定の概念を藏しその爲になくなつて行くのである。それは何か辯士そのものである。

聴衆の少きを奮慨する前に一体自分は聞くに價する事を云つてゐるかと云ふ事を知らねばならない。それが最大の原因である。

先日の演説會に於てもリットン報告の認識不足が二人か三人の口から出て來たのである。リットン報告は確に認識不足である。併も彼等はリットンの報告書を批判した如く云つたのであるが故にリットン報告書はそれが發表される以前より認識不足であらねばならぬかと云ふ事を知つてはゐない。唯新聞に認識不足と云ふからして認識不足に相異ないと確信したのでは全く辯士自身が認識不足である。

我軍の行動は正義である。併し乍ら何が故に正義と云はれねばならぬかは知らない。

勿論それはリットン報告の場合の如き彼等には望むべ

くもない。演説部の衰微は此處にある。

龍南大衆は、かかる認識不足の言を聞くには餘りにも認識充足であつたのだ。

一体演説會は何の爲に有るか？

一口にして云へばそれは發表機關である、所が現代に於ける演説會の傾向はどんなにあるか、辯士諸君の日頃研究し考へ盡したる事を何時どうして發表しやうかと惑ひ此處に演説會を利用し得るのではないか。

今の辯士諸君自身はどうだ、勿論二三の例外は存するのであるが、演説會がある。どれ原稿を書うか、本多さん何かよい参考書はありませんか、正しく此を稱して演説會の爲の原稿と私は云ふ。

全く今の學生辯論會に於ては、原稿の爲の辯論會と云ふものが反對になつてゐる。これを私は演説部の自己反對と云ふものである。若し演説會の爲の原稿であるならば、原稿呈出者は、賞品ほしさ以外の何者でも斷じてないと思ふ。

諸君演説は術ではない、思想の戦いだ。

諸君演説は態度音聲内容を以て採點するべきものではない。演説の採點と云ふ事が現代に於ける演説者をして浪花節かたりと同等に見せたのである。演説は思想の闘争であらねばならぬ。日本一と云はれる永井柳太郎氏の演説を見よ。態度、音聲、内容皆滿點、その永井柳太郎氏に反對の聲起るは何ぞ、口だけで實行がない正しく彼には思想の闘争がない。永井拓相の演説は永久に美辭麗句流暢たる音聲に止り人をして浪花節聞くが如き感じを與へしむると云ふ永井拓相の演説は斷じて天下國家を動かし得る雄辯とはなり得ないものである。

試みに見よ、同じ不具者でも中野正剛を、態度、音聲内容皆零點であるにも係らず人々は云ふ中野は日本一の雄辯家だと諸君中野代議士のあの闘争心を見よ。思想の闘争としての演説、正しくこれでなければならぬ。

演説に志さんとする諸君よ、態度、音聲は第二段目である。先づ第一に練るべき事は眞の思想と、それを實行するだけの闘争心にあるのだ。

此が出来たならば即ちその思想は人として感ぜしめ、

又それを動かすだけの熱も必然的に出て来る。あの人の演説は熱がないと云ふ言葉をよく聞く。諸君「私貴方を愛します」と云ふ演説には斷じて熱は出ませぬぞ。

若し今日の辯士諸君にして、その手拭の文字思想は闘争なりをよく自覺するならば、我演説部の未來は期せずして豫測出来るであらう。それを忘れて辯士諸君が賞品目あての演説をなす以上「聴衆亦何ぞ走せ參らん」と云ふ事はいかに演説部の制度をかへて見ても斷じて盛ならしむる事は出来ないと云ふ事である。之私が龍南人一般に思想を練れと云ふ事即ちよく考へろと云ふ事にもなるであらう。

「日本に於て今日思想困難と呼ばれるものは左翼一派の思想であらうがそれは大した事ではない、思想困難々々々々と呼び廻るその人自身の無思想こそ正しく現代日本の思想國難である。「處世の道」は實に無思想の表れと私は見た。

諸君思索を練れ、人生と思索は別つべからざるものである。そして人を恐れぬ精神的腹を養ふ事は之青年學徒

の忘るべからざる事と思ふ、就中演説辯士諸君に更に一層それを望む次第である。